上高井教育会報

第176号
発行所　上高井教育会
発行人　上高井教育会長　宮前日王
編集人　会報編集委員長　越忠男
印刷所　須坂新聞社

「子どもをどう授業に参加させるか」学びの視点で授業を

研究副委員長　山岸　徹

昨年度までの五年間の研究のまとめの上に立ち、今年度も筑波大学教授谷川彰英先生を中心講師としてお迎えし、「自ら課題をもって、学ぶ喜びを味わえる授業」を中心テーマにした一年次の研究を進めてきました。内容としては①基礎的・基本的な内容を重視し、教材研究を深めた授業②体験的活動を重視し、活動の量や質を高める授業　③子ども自らの追及課題を明確に学習する授業の実践・具現化です。

五月十七日には、谷川先生より『「学び」の時代に新しい授業観』の演題でご講演をいただきました。その中で、新しい授業観の中核になる参加型授業論を更に発展させた形で「学び」についての提唱がありました。

社会情勢の変化に伴い、学校というものの機能が変わってきている。一定の知識や学問、文化的遺産というものを伝達していく機能（教える教育）は不可欠であるが、一方、子どもたちが自主的に自分たちの世界を作っていくような力を育てる機能（育てる教育）も大事にしていかなければならない。

「学び」というものは、周辺参加していくこと、一つの共同体の中で行われる教育・学習の形である。「学ぶ」ということは、一つの共同体の中にのめり込んでいくことで、「学び」の方法論を身につけることである。

従って、学び方を習得することによって、次から次へと新しい展開をしていく力、生きる力を育てる学校というものの機能が重要になってくる。

具体的には、今までの授業形態そのものを大きく変える必要はないが、部分的には子どもたちが主体的に参加できる場面（自由にやれる場面）を保障することである。そうすることによって授業も変わる。

なるべく多くの子どもたちが参加するための条件としては、①意欲的になれる子、②活動的な子、③いろいろな人たちと交流できる子、④役割を自分で明確にする子、⑤自らが評価してほしいという気持ちになる子を育てること。

以上が、谷川先生のお話の要旨と受けとめました。

このお話を受けて、九月二日には、日野小学校で谷川先生をお迎えして、特別活動の研究授業「大きくなあれ、わたしたちのチッチとピッピ」が行われた。

谷川先生からは、これからのあらゆる授業、教科・領域を含めて学ぶべきこととしての『①子どもたちが、一つ一つめあてを持って、それに向かっていくことの保障、②工夫することの保障、③集団の中での役割を明確にし、演じることの保障、④やり遂げる力を持たせる保障』の提案がなされた授業だったとの講評をいただきました。

（日滝小）

女教師研究大会を終えて

女教師研究委員長　佐藤富美子

今年度、女教師委員会ではテーマを「人間性豊かな児童生徒を育てるために私たちはどのようにしたらよいか」と設定して、活動を進めてまいりました。私たち上高井は、県内でも女教師の占める割合が高い郡市であることはご承知のとおりです。その現状をふまえ「二十一世紀に向けて私たち女教師が学校づくりにどのように参画していかなければならないか」ということを考え合う時期に来ているのではないかという視点に立ち、サブテーマを～学校づくりと私たち～といたしました。

そして女教師大会では、日ごろの実践や悩みを語り合う中で、互いに考え合って自分の意識を見つめることができればと願い、次の六つの分科会を設定しました。

一「私自身が人間性を豊かにするために」
二「学級づくりと授業づくり」
三「学校運営にどのようにかかわっていくか」
四「校務分掌の在り方をさぐる」
五「開かれた学校づくりと私たち」
六「二十一世紀に向けての女教師委員会」

それぞれの分科会に助言者として経験豊かな先生方をお迎えすることができ、話し合いも充実したものとなりました。本当にありがとうございました。

第一分科会では、文化に親しんだり、悩みを語り合ったりでき、有意義な研修の場となりました。

第二分科会では、自分が毎日接している子供たちを頭に置きながらの話し合いとなり、明日からの実践につなげていける多くのものを得ることができました。

第三分科会では、今自分の置かれている立場でできることを精一杯やることが大切。子育て中でも一人の教師として後へ引いたりしないで、と先輩の先生から強い励ましをいただきました。

第四分科会では、悩みを出し合う中で、具体的に仕事の進め方を示唆いただいたり、校務分掌の決定の方向を知ったりでき、この問題に対する意識を高めることができました。

第五分科会では、保護者との関わり方に焦点を当て、意見を交換しました。プロとして聞く耳を持ち、女性としての良さを十分に発揮して子どもを支えていただきたいと励ましの言葉をいただきました。

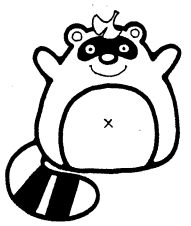
第六分科会では、自分の職場での姿勢を見直し、教師として人間として力をつけていかねばという先を展望した意見を持つことができました。

大会を通して多くのことを学ぶことができました。大会資料に載せられた男性の先生方の声を頭におきながら、教師としての自分の在り方を考えていきたいと思います。

（井上小）

教育会だより

10・23　第5回常任委員会
10・28　研究小委員会
10・30　第5回代議員会
11・15　教育会中間監査
11・18　研究日
11・28　会報176号発行



文部省指定選択制授業研究中間発表

國原　仁

本校では「明るい中学生になろう」「粘り強い中学生になろう」「たくましい中学生になろう」「誠実な中学生になろう」を教育目標にすえ、全教育活動を通じて、生徒自らが思考・判断し、一人ひとりが主体的に活動する力を育成しようとしている。そのために、生徒個々に応じた、それぞれの特性を生かす援助の仕方や指導方法を工夫してきている。

今日の保健体育では、生涯スポーツの実践主体となる生徒の育成をめざしている。そのことを、生徒の主体的な活動と結びつけて考えたとき、生徒一人ひとりが、自分の能力（スポーツを構成する技術に自分なりの方法を加えてできる力）・適性（どんな部分で、どのような場面で自分を生かせるか）をとらえること。（本校ではこれを個性ととらえる）その上で、自らの興味・関心から自分にふさわしい運動種目や学習内容を選びながら学習を進めていくことのできる力を育成すること、自らの運動を選択し実践する中で、技能の伸びを体感し、さらに次の段階を追究できる力。課題を明確に持ち、それに向かっての挑戦の仕方や、解決の方法を工夫する力。自ら選んだ種目を大切に、全力でより楽しいものにしようとする意思。さらに、運動を共有する仲間との間での責任感や、ルールやマナーに関して自己を管理する力の育成が必要であり、生徒一人ひとりにそのような力が身についてきた時、本当の意味での「生きて働く力」（自己教育力）につながると考える。

このような点もふまえ、生徒の学習を創造する力、相互のかかわり方、T・T（外部指導者）を含めた指導・援助の在り方の工夫、三年間を見通した生徒につける力と発展的な指導について焦点をあてて、研究を進めている。

（相森中）

県図書館大会小諸大会に参加して

宮坂ゆかり

第四十七回長野県図書館大会が、十月十七・十八日の二日間、小諸市にて開催されました。上小出身の私にとっては、小諸といえば「懐古園」、藤村ゆかりの里として、身近に感じるところです。

吹き抜けのある広いエントランスホールを持つ小諸東中学校で受付・開会式の後、研究テーマごとに四会場九部会に分かれました。私は、小四・小六と二つの授業を公開する野岸小学校へ移動しました。

野岸小では、全校児童による「11ぴきのねこ」組曲の合唱披露の後、「夢中になって本を読み、その楽しさを味わうことのできる子ども」「さまざまな資料や情報を自ら求め、活用して課題を解決する力を持った子ども」の育成をめざして、二年間にわたり研究されてきた成果が、発表されました。

参観した六年の授業は「みんなで考えよう、私たちの生きる今」という総合単元における読書や体験、調査を中心とした調べ学習の成果発表の場面でした。資料としての読書、障害者の方や周囲の人々の心情に迫るための読書、発表を聞く友だちの心を揺さぶるフレーズを探すための読書と、短い発表の中に、今までの読書の在り様が凝縮されていました。させられる読書ではなく、自ら求めてする読書の姿を見てきました。

野岸小の図書室は割と狭く、読書スペースは限られていましたが、蔵書は豊富で、特に地域に関する図書がよく集められていました。

二日目は、九部会十九分科会に分かれて研究協議が行われました。小・中学部会・第五分科会で、高山中の古澤珠美先生に「意欲的な読書生活をする子どもを育てるには」というテーマでレポート発表していただきました。〈本を子どもに近づける手立て〉〈生徒会活動の実際〉の二点にしぼって、実践に即した内容でした。古澤先生の指導のもと、図書委員が実際に行った「ブックトーク」のシナリオとビデオの視聴や、図書紹介に利用したブックレット（書店から寄付された物）の配布は、殊に参会者の皆さんに好評でした。

本参加レポートは、図書館教育研究集録に収めますので、是非ご一読いただきたいと思います。

（須坂小）

ぼくたち、わたしたちのなかよし大作戦

百瀬美千代

五年生の夏といえば、峰の原宿泊訓練。先輩たちから話を聞いて、とっても楽しみにしている五年生。更に、今年は他校と一緒に行くことになっている。初めて会う友だちと「仲よくなりたい。」「友だちをたくさん作りたい。」と願った子供たち。反面、「話しかけられるか、心配。」と不安をもらす子供たちもいた。そこで、須坂小学校のお友だちとみんなが仲よくなるための『なかよし大作戦』を考えた。「自由に話しかける。」「名刺などで自己紹介。」「ゲームで自己紹介。」「手紙の交換。」と子供たちの発想を生かした活動がスタートした。

そして、いよいよ峰の原宿泊訓練。作戦の実行である。思うようにいかなかったところもあったが、自分たちの作戦を精一杯行っていた様子が伺われた。そうして、新しい友だちができて、最終日には自由時間に、共にドッジボールで歓声をあげている姿が見られた。

二学期に入り、峰の原の活動を振り返る中で、「もう一度交流会をしたい。」という積極的な意見が出された。須坂小学校へのアンケートにより、交流試合を行うことになり計画立案に入った。夏休みに市の大会を経験した子供たちは、今度は、自分たちで計画運営するということで、ドキドキワクワク、気分も盛り上がっていった。

まずは、種目を決めることになった。ラケットベースボールにするか、ドッジボールにするか、意見が二つに分かれた。そこで、本時は、それぞれの種目のよさをPRし合い、納得するまで話し合い、種目を一つに決めていこうとした。子供たち一人ひとりの考えが充分出せ、生かせるように、二つの手立てを考えた。事前に学級会カードに根拠をはっきりさせて意見をまとめておくこと、そして、小グループの討議を取り入れること。カードをもとに、激論がかわされた。友だちの意見を聞いて、何度も「う～ん。」と考え込んでいたK児。自分の考えを見直し、変えていったT児等、相手の考えを聞きながら、よりよい妥協をして行こうとする姿が見られた。そうして次時、学級として一つの意見にまとまっていった。

体験をくり返す中で、更によりよい活動を創り上げていこうとする子供たちだった。

（小山小）

環境問題の授業を通して

藤沢　誠一

生徒は、環境問題に強い関心と興味を持っている。それは「社会の中であなたが関心を持っていることは？」という授業に関するアンケートに四五％の生徒が環境問題をとりあげ、数値としても最も高かったことからもわかる。しかし、生徒の環境問題に対する反応の多くは、現象面に対する情緒的な捉えや漠然とした認識であることが多い。そこには外の環境と自分自身の生活とが離れている状況があるように思う。環境問題を自分の足元から捉え直し、問題点を明らかにしながらその解決に向けて自分自身の問題と私生活を見つめることができるようにさせたい。そのためには、毎日の生活の中から素材を見つけ、教材化することが大切ではないかと考えて授業を行った。

「身近な生活の中から」ということで、生徒自らが自分自身の日常生活を見つめて撮った「環境チェック写真」と称する写真を教材化して授業構想を練っていった。導入の時間、以前に録画しておいたNHKテレビ『ためしてガッテン』（環境問題特集）は大いに役立った。この視聴ののち環境問題に関わって身近な日常の中で気になっている点や工夫している点について一人が一枚ずつ写真を撮って持ち寄ってみようと働きかけた。

いざ、はじめると「何を撮ったらいいのか分からない」という声もあったが、予想した以上に生徒はいろいろな所の場面を撮ってきた。台所、風呂場、排水口、ゴミの収集所、道路・公園などのポイ捨てのゴミ、不法投棄などであった。生徒たちを見ていると楽しんで写真を撮りながら、しかし、「こんな状態でいいんだろうか」という環境問題に対するエネルギーもしっかりつかんだようだった。

授業の方は公園の清掃体験を通して須坂市とポイ捨て条例の是非をめぐる討論へと進んだが、環境問題は「わかっているができない」しかし、「今取り組まねばならない」ことである。今回の授業を通して生徒ともに一番学んだのは私なのかもしれない。

（墨坂中）

県視放研上伊那大会参加報告

小林　巧

私の参加した高遠中学校会場では、国語、体育、技術・家庭科の実証授業が公開されました。

授業の中で使用された視聴覚機器は、VTR、カセットテープレコーダー、パソコン、実物投影機でありました。VTRは三教科共に活用されておりましたが、その用法がそれぞれ違っておりました。

国語では、古典の「範読」に用いられていました。VTRによるそれは私にとっては珍しく拝見させていただきました。VTRですから制作者の意図を伴った実像やイメージ映像が加わっており、このことが、生徒が自分なりのイメージを膨らませるのにどうであったかは、気になる部分でした。

体育では、自分たちの剣道の試合を「再現」し、反省することに用いられておりました。観点を定めるに、防具にマーカーをつけて、撮影していた工夫に感心致しました。

技術・家庭科では、節電をしている家庭の様子を視聴し、自らの家庭で節電のためにできることをまとめておりました。これはVTRを用いた「環境移入」（学校の一切授業に持ちこめない環境を疑似的に持ちこむ）という使い方ではないかと思います。

全体会では、昨年度の大会担当郡市である佐久の学校の研究が発表されました。インターネットの活用実践例でありましたが、ネットへの接続が、先生個人のコンピュータによってなされていると伺って早期の予算付けを要望したい思いにかられました。

講演会は、STUDY開発者の筑波大学名誉教授中山和彦先生の熱弁でした。先生は、さすがに造詣が深く、「脱○○時代というのは、○○を捨てることではない。人口比が減少することであり、むしろ、生産量は増加している。○○の上に立って△△を活用・創造していくことだ。」と力説されました。いたずらに、知新を唱えることに疑問を感じていた私の悶々とした心持ちを整理していただき、励まされる思いでした。

来年度は、本郡市が担当です。本年度のような授業、講演会が提供できるよう努力したいと思います。

（小布施中）

本校の宝⑳

第一回『くぬぎ祭』

須坂小学校

前回は「本立而道生」の記念校名額を中心に寄稿したが、このシリーズも二巡目に入るというので、今回は本校が今年から教育活動の中に大事に位置づけて、今後学校の「宝」としていきたい『くぬぎ祭』について書くことにする。

教育目標を「本立ちて道生ず」の建学の精神に基づき、

●あした文化の花をつみ
●心理の泉ともに汲み
●われらが道を求めゆく

と、今年度より児童に親しみやすいように校歌から引用して新しくすえた。

この目標実現のために、断片化された教科ごとの指導体制を見直し、また教師主導の教育からの授業改善を図りつつ、一人ひとりの児童を主体とした総合的学習を中心に、児童の意欲・関心を重視した学習の展開を考えてきた。

こうした学習は、自らの追究の喜びと同時に他と共に学び、その成果を多くの人を相手に発表するという喜びを伴う。『くぬぎ祭』はそうした必然性から誕生した。

十月十四日の第一部では、各学級で中核活動として進められてきた学習の概要を全校の前で発表し合った。十八日の第二部では学級単位で保護者と共に第一部の内容をより深めたり、興味のある学級へ行くチャレンジコーナーを設けた。

二年の「昔から伝わる行事」でおだんごを作ったり、四年の「水」をテーマにした追究から環境問題を考えた。六年の「須坂市の製糸業」では実際に糸取りをし、郷土の歴史文化にふれたりもした。

期間中、全校一丸となって燃え、嬉々として活動する児童の姿から、初の試みの確かな手応えを感じた。

（神津　隆）

菊組　パン作り風景

火ばち談義

むだばなし

中村　仁奈

今、私が担任しているのは、二年生二十名の子供たち。教職についてからもう今年で五年目ですが、前任校で特殊学級の担任をしていたことから、通常のクラスを持つのは、今のクラスが初めてでした。それだけに、戸惑うこともしばしばありました。まず、それまでは二、三人のクラスでしたので、大勢の子の前で話すことにとても緊張しました。それから、黒板を使って授業をすることにもしばらくの間慣れなくて困りました。また、一年生ということで、驚かされることがたくさんありました。

戸惑い・驚き　ベスト10

①授業中など誰かが話していてもおかまいなしに大きな声で話し出す　②「先生～！」と複数の子が一斉に話しかけてくる　③そんなことでと思うようなことでケンカする　④こんなものをと思うようなものまで欲しがる　⑤疲れていても遊ぶ　⑥とりあえず、何でもやりたがる　⑦自分にもあてはまっているくせに、人のことは注意する　⑧頭に被っている帽子を必死に探す　⑨「先生が言ったもん」の一言で誰も反論しなくなる　⑩信じられないくらい素直でかわいい

数え上げればきりがなくてやっと十個に絞りました。二年生になった今でも十分当てはまっているものもいくつかあります。この中で、私にプレッシャーを与え続けているのは⑨。「めったなことは言えない」と自分の言葉の重みをずっしりと感じます。

書きながら、つい先日のことを思い出しました。

秋の遠足に当たって、蜂に気をつけるように話をしました。「蜂は白いものより黒いものを攻撃するんだよ。」「だから紅白帽子をかぶっていかないとね。」後日、給食中に蜂が一匹、教室の中に入りこんで来ました。ふと子供たちの方を見ると、全員が紅白帽子をかぶって給食を食べていました。

何ともかわいい子供たちです。

（豊丘小）

東中　村石　靖

林道を愉しむ

羽田　卓也

星を眺めることが趣味の私ですが、最近の市街地は人工の光があふれ、星の見えにくさは一昔前の東京近郊外並みです。やむなく美しい星空を求めて人里離れた山中をジプシーのようにさまようのですが、そんな中でたどった林道を紹介します。

最初に林道湯沢線です。高山村福井原から概ね樋沢川に沿って溯っていきます。谷の両側は秋になると美しい紅葉におおわれますが、前方にはかなりの角度で稜線がそびえ、あそこまで行けるかと不安な気がします。樋沢川が湯沢となり、林道が右岸をたどるようになると、道はさらに険しくなりますが、危険を感じるほどではありません。やがて右に破風岳の北斜面が奇妙な姿を見せてきます。初夏には、緑の破風岳と赤茶けた湯沢の川原とが好対照です。ここまでくると終点まであと一息。高山村牧から万山望を経て毛無峠に至る舗装道路との合流点までが林道の終点です。峠まで二・三分、眼下に小串鉱山跡、その彼方に群馬県嬬恋村が広がります。

次は大谷不動線で、道はこちらの方が整備されています。県道四〇六号を仙仁の宇原橋手前で左に入り、宇原川に沿って高度をかせぎます。大谷不動辺りから川筋を離れて梯子山の北東斜面を登っていきます。左右の林にはシダ植物も豊富で豊かな植物相を見せてくれますが、こんな山奥にも不法投棄された廃棄物の山が所々にあり、憤りをおぼえます。植林されたカラマツが見え始めると峰の原まであと少し。須坂青年の家やグリーンゴルフの前を通る頃には対向車も現れます。

○菱パジ○○やト○タのラン○ルでなくても、無雪期であれば楽しめる林道は他にもたくさんあります。エンジンを切ったときの静けさ、沢のせせらぎや鳥の声、夜は満天の星が輝きます。皆さんもいかがでしょうか。

（仁礼小）

ギャップ

望月しのぶ

四月三日、一学期始業式。私は、体育館に整列した黒い集団に圧倒された。

「なんて大きいんだろう。」今までに見たことのない光景に、ステージに登る足も思わずすくんでしまった。それもそのはず、前任校は小学校。中学校に赴任するのはこれが初めてだ。私服姿の小さい小学生に目が慣れていた私にとって、制服姿の大きい中学生は見慣れるまでに時間がかかった。

これだけではない。他にも慣れるまでに時間がかかったことがいくつもある。そのひとつが教科担任制だ。私の場合は美術のみを全クラスに教えているのだが、最初はこれに違和感があった。全教科でなく、一教科だけを教えるということ。そして、一クラスでなく全クラスを教えるということ。小学校に比べて教材研究が楽になったと感じる反面、発達段階の異なる三つの学年に応じて指導や接し方を変えるのが大変になったと感じている。あたりまえのことなのだが。

慣れるまでに時間がかかったもう一つは部活だ。朝と放課後の練習に加えて休日の練習。私は文化部なのでまだいい方だが、運動部は休日も練習に試合にと忙しい。（運動部の先生方、本当にご苦労さまです。）中学校は毎日空き時間があってうれしい反面、部活指導に割く時間が多くて大変だと思う。これもあたりまえのことなのだが。

初めての異動、それも小学校から中学校への異動ということもあり、一学期は環境の変化に戸惑うことが多かったが、もう大分慣れてきた気がする。慣れがマンネリや手抜きにつながらないように、私自身が常に向上心を持って日々精進していきたいと思っている。また、小学校での経験を生かしながら、心が揺れ動く多感な年頃の子供たちとのコミュニケーションを大切にしていきたい。

（常盤中）

編集後記

実りの秋の終わりに、様々な研修会・研究会の成果を集めてお届けします。

お忙しい中、原稿依頼を快くお引き受けくださり、貴重な原稿をお寄せくださった先生方、本当にありがとうございました。

今年も各地から雪の便りが届くようになりました。日毎に寒さが厳しくなり、学期末を迎えて何かと忙しくもなります。風邪などひかれぬよう、お体に気をつけてお過ごしください。

（藤沢・畑中）